

—終助詞と文末音調による発話場面の变化について—

1 はじめに

本稿では、命令形、連用形、テ形の3形式を有する方言のうち、福岡市方言の記述を行う。当該方言の命令表現は森・平塚・中村（2012）により報告されているが、先行研究で言及されていない終助詞・文末音調と発話機能及び発話場面の対応の観点も加えて詳述したい。

2.1 発話機能と発話場面

表 1 命令表現における発話機能の分類（高木 2009:108 より一部改変して引用）

	非聞き手利益	聞き手利益
拘束力・強	《命令》	《聞き手利益命令》
拘束力・弱	《依頼》	《勧め》

- (1) 突っ立ってないでそこに座れ。 《命令》
(2) 前が見えないから、座ってくれる？ 《依頼》

– 25 –

(3) 疲れているだろう。いいから座れ。 《聞き手利益命令》

(4) 向こうの席が空いたから、座ったらどうだ？ 《勧め》

(高木 2009:108)

加えて、高木 (2009:109) は命令表現を選択する要因として「発話場面と発話行為の関係」(以下、「発話場面」とし [] で示す) を挙げている。これには [指示] (単なる行為の指示), [現場指示] (その行為が実行されるタイミングを示す命令), [違反矯正] (すでに実行されているべき行為が実行されていないという違反を正す命令), [確認的指示] (将来実行されるべき行為について念押しする命令) の 4 つがある。以下, (5) ~ (8) に各発話場面の用例を示すが, その場面において不適格なものには#を付す。また, 文末の音調が上昇する場合は↑を, 下降する場合は↓を記す。

(5) 気分転換に, 散歩でも {行け／行けよ↓／#行けよ↑}。 [指示]

(6) 今だ, {行け／#行けよ↓／#行けよ↑} ! [現場指示]

(7) 何をやってるんだ, 早く {行け／行けよ↓／#行けよ↑} ! [違反矯正]

(8) 明日は間に合うように {#行け／#行けよ↓／行けよ↑}。 [確認的指示]

(高木 2009:110)

2.2 人間関係のネットワーク

発話機能と同様に, 諸方言における命令表現の記述で用いられるのが, 牧野 (2008:61) が示した人間関係のネットワークの枠組みである。この枠組みは, 話し手と聞き手の「上下関係」と「親疎関係」の 2 つの観点から想定される聞き手を分類したもので, 表 2 のようになる。なお, 表中の S は話し手, H は聞き手を表し, >< の不等号は上下関係を表すもので, 開いている方が上位となる。= は同等の関係を表す。なお, 「非常に親しいソト」「少し親しいソト」においては, 上位者へ命令表現を使うことが想定されにくいため表には含まれない²。

表 2 人間関係のネットワーク (牧野 2008:61 から一部改変して引用)

家族			非常に親しいソト		少し親しいソト	
下位へ S>H	同等 S=H	上位へ S<H	下位へ S>H	同等 S=H	上位へ S>H	同等 S=H

2.3 福岡市方言における命令表現の研究

森・平塚・中村 (2012:3) は, 福岡市方言における命令表現の 3 形式の活用について, 次項の表 3 のようにまとめている。形式が複数並んでいるものは左の形式が多用される。

連用形には「ミリ」「オキリ」「ネリ」「タベリ」の形式が確認できるため, ラ行五段化が認められる。また, 連用形には「イキ (一)」のような母音長呼が見られるが, 森・平塚・中村 (2012:3) は, 母音の長短による意味的な違いがないとしている。ただし, サ変・カ変の長呼は義務的であることを述べている。命令形の五段活用形 (「ミレ」等) は, 若年層では衰退の傾向があり, 標準語と同形 (「ミロ」など) が用いられることも指摘している。

² 本稿では家族の同等 (牧野は「配偶者同士」を想定している) は調査していない。

表3 福岡市の命令表現（森・平塚・中村 2012:3 より一部改変して引用）

活用	動詞	命令形	連用形	テ形
五段動詞	行く	イケ	イキ（一）	イッテ
上一段動詞	見る	ミロ／ミレ	ミリ（一）	ミテ
	起きる	オキロ／オキレ	オキリ（一）	オキテ
下一段動詞	寝る	ネロ／ネレ	ネリ（一）	ネテ
	食べる	タベロ／タベレ	タベリ（一）	タベテ
サ変動詞	する	シロ／セレ／セロ	シー	シテ
カ変動詞	来る	コイ	キー	キテ

森・平塚・中村の記述から、福岡市方言における命令表現の発話機能と形式の体系については、下の表4のようにまとめられる。なお、当該先行研究では、発話機能の枠組みは聞き手の非利益／利益ではなく、話し手利益／聞き手利益で設定されているため、拘束力の強い発話機能は《話し手利益命令》と《聞き手利益命令》になる。

表4 福岡市の命令表現の機能と形式の対応（森・平塚・中村 2012 から作成）

《話し手利益命令》 テ形	《聞き手利益命令》 連用形，命令形
《依頼》 テ形	《勧め》 連用形

《話し手利益命令》《依頼》では、どのような聞き手でもテ形を用いるとしている。ただし、《依頼》では西日本共通語的な「-テクレン」や伝統方言的な「-テヤラン」など、補助動詞として授受表現を用いた形式が使用されることもあるとしている。《聞き手利益命令》では、家族の目下と非常に親しいソトに対し連用形と命令形が、家族の目上と少し親しいソトに対しては連用形が用いられるとしている。《勧め》ではどのような聞き手でも連用形を用いる。以上の発話機能を担う用例を(9)～(12)に示す。

(9) [聞き手の近くにある工具がほしい] そこのドライバー取ッテ。 《話し手利益命令》

(10) [機械の使い方／料理の作り方／勉強が] わからないから教えテ。 《依頼》

(11) [聞き手：非常に親しいソト。昨日転んで打ったところが腫れてきたと聞き、骨折を心配し]
今すぐ病院に {行き（一）／行ケ}。 《聞き手利益命令》

(12) [突然の雨で傘を貸そうとする] この傘でよければ持って行き（一）。 《勧め》

（森・平塚・中村 2012:13-14）

また、表4の発話機能のほかに、森・平塚・中村（2012:6）は《権威的命令》という機能を設定している。これは、行為の達成によって得られる利益が話し手／聞き手に決められるものではなく、「公のため」の利益であるもの、もしくは受益者が想定できないものや話し手・聞き手双方に利益があるものを指す。《権威的命令》の場合、家族の目下、及び非常に親しいソトに対しては3形式す

すべての使用が可能であるという。ただし、命令形を用いる場合は、「話し手が聞き手の態度にいらだっているとき」などのような、話し手のニュートラルでない態度が感じられるとしている。家族の目上と少し親しいソトに対しては命令形を使うことはなく、連用形やテ形が用いられる。テ形の方が連用形より丁寧な表現であることも述べている。用例を(13)に示す。

(13) [聞き手：非常に親しいソト。一緒に掃除をしているが、聞き手が怠けている]

ちゃんと掃除 {シテ／シー／シロ}。

《権威的命令》

(森・平塚・中村 2012:14)

ところで、命令表現に後接する表現として、平塚(2011:59)は福岡市若年層における「ッテ」について述べている。「ッテ」には「話し手との知識・認識のずれの明示」の用法があるとし、次の(14)の例を上げている。

(14) A：今日は先に帰ってもいいよ。

B：え、でも。

C：いいから、早く帰れッテ。

(平塚 2011:59)

この例について平塚は「納得していないBの態度を変えさせようとする効果をッテが担っている」と述べており、「納得していないBの態度」という違反を改めて行為実行を要求する[違反矯正]の場面と言える。

2.4 先行研究の課題と本稿における記述の方針

ここまで概観した通り、森・平塚・中村(2012)の研究では、後接する終助詞や文末音調についての検討がなされていない。しかし、久保(2021ab,2022,2023)の一連の研究から見られるように、上記の要素が発話機能や発話場面によって変化するのは明白である。したがって本稿では、森・平塚・中村の研究手法(人間関係のネットワークを用いた記述)は踏襲しつつ、高木(2009:109)の発話場面の4分類の観点をを用いて記述を行う。ただし、想定される場面は高木の示した4分類からさらに詳細なものになる場合もあるため、適宜発話場面に追加される条件を示す(例：[指示+必死さ])。また、本稿においては、拘束力の強弱と聞き手利益／非利益の枠組みを主軸とした記述を行うため、《権威的命令》については考察の対象外とする。

本稿では、平塚(2011)が記述した「ッテ」の用法にも注目する。「ッテ」を扱うにあたり当該形式の品詞を定める必要があるが、これについては三枝(1997)を参考にする。標準語における「って」を記述した三枝は、「って」は「とて」が起源であるとし、「引用」と「逆接条件」の2つの用法があると述べている。「引用」の用法は「引用」「話題の引き込み」「反復」「伝聞」「言いつけ」「問い返し」「訴えかけ」の7つの下位の用法に区分できるとし、このうち命令表現に後接する「って」の用法は「訴えかけ」であるとし、終助詞として扱っている³。三枝の論は標準語におけるものだが、福岡市方言の「ッテ」にも共通すると考えられるため、本稿では「ッテ」を終助詞と見なす。

本稿で示す用例については、命令表現の部分のみ片仮名で表記し、それ以外の部分は標準語で示

³ 三枝(1997)は「訴えかけ」について、地の文では当初「強調」としているが、各用法の個別の記述の際に「訴えかけ」に置き換えている。「訴えかけ」以外の6つの用法については三枝(1997)を参照されたい。

す。音調記号については“[”が上昇，“]”が下降を表す。

なお、本稿における話者は森・平塚・中村の研究と同じ話者である⁴。

3 述語の音調

3.1 命令表現のアクセント

福岡市の命令表現における活用の種類ごとの終止形及び3形式のアクセントは表5の通りである⁵。

表5 福岡市方言の命令表現の音調

活用	拍	類	語例	終止形	命令形	連用形	テ形
五段	2 拍	1 類	行く	イ]ク	イ]ケ	イ[キ[ー イ[キ	イッ[テ
		2 類	書く	カ]ク	カ]ケ	カ[キ[ー カ[キ	カイ[テ
	3 拍	1 類	歌う	ウ[タ]ウ	ウ[タ]エ	ウ[タイ[ー ウ[タイ	ウ[タッテ
		2 類	思う	オ[モ]ウ	オ[モ]エ	オ[モイ[ー オ[モイ	オ[モッテ
		3 類	歩く	ア[ル]ク	ア[ル]ケ	アル[キ[ー ア[ルキ	ア[ルイテ
一段	2 拍	1 類	寝る	ネ]ル	ネ]ロ ネ]レ	ネ[リ[ー ネ[リ	ネ[テ
		2 類	見る	ミ]ル	ミ]ロ ミ]レ	ミ[リ[ー ミ[リ	ミ[テ
	3 拍	1 類	埋める	ウ[メ]ル	ウ[メ]ロ ウ[メ]レ	ウ[メリ[ー ウ[メリ	ウ[メテ
		2 類	逃げる	ニ[ゲ]ル	ニ[ゲ]ロ ニ[ゲ]レ	ニ[グリ[ー ニ[グリ	ニ[ゲテ
カ変	2 拍		来る	ク]ル	コ]イ	キ[ー	キ[テ
サ変	2 拍		する	ス]ル	シ]ロ セ]レ セ]ロ	シ[ー	シ[テ

終止形は、2 拍動詞は 1 型（語頭にアクセント核）、3 拍動詞は 2 型（頭から 2 拍目にアクセント核）となり、先行研究と一致する。命令形はその型を引き継いで活用され、終止形とアクセント核の位置は変わらない。連用形はいずれも無核で発音される。また、長音化し上昇音調が伴う場合と

⁴ 森・平塚・中村（2012）の記述は著者自身の内省で書かれており、福岡市は平塚氏の内省によって記述されている。したがって、本稿における話者も平塚氏本人（1983 年生、男性、21 歳まで福岡市に、以降は県外と福岡市を行き来し、現在は県外に居住）となる。

⁵ 「アル[キ[ー」のみピッチの上がり目が他の動詞と異なるが、音韻的対立を成すものではない。

短く発音される場合があるが、カ変・サ変は長音のみである。テ形は連用形と同様に無核で発音されるが、長音化はされない。

3.2 文末音調

文末音調については、連用形が長音化した場合に上昇音調が認められる。この音調は必須であり、「イ[キー]」のような上昇のない長音化は許容されない。テ形は上昇音調を伴うことはなく、「イッ[テ一]」のような上昇音調は標準語的であるという内省を得ている。命令形には特別な文末音調は伴わない。また、終助詞が後接した場合にのみ見られる音調がある。それが、終助詞が前の拍に対して低く接続する「低接音調」、終助詞が前の拍に対して低く接続し上昇する「低接疑問上昇音調」、終助詞の拍が前の拍より高く発音される「強調上昇音調」、終助詞の前に長音化して下降する「下降音調」の4つであり、用例を(15)～(18)に示す。

- | | |
|---|------------|
| (15) <u>カ</u> <u>イテ</u> ッテ。(書け。) | 【低接音調】 |
| (16) 明日忘れずに <u>カッ</u> <u>テ</u> ネ <u>一</u> 。(買えよ。) | 【低接疑問上昇音調】 |
| (17) 何か困ったことがあったら私に <u>レン</u> <u>ラクシ</u> <u>ロ</u> <u>ヨ</u> 。(連絡しろ。) | 【強調上昇音調】 |
| (18) 今ならバスに間に合うから早く <u>イ</u> <u>キー</u> ヨ。(行け。) | 【下降音調】 |

4 発話機能ごとに用いられる形式

4.1 《命令》

《命令》の機能を担う発話では、全ての聞き手に対して基本的にテ形が用いられる。[指示][現場指示]の場合、テ形単独が用いられるのに対し、[違反矯正]は終助詞「ッテ」を低接音調で後接させる。[確認的指示]は終助詞が伴わない形式で表すことはできず、テ形に終助詞「ネ」を低接疑問上昇音調で後接させる。怒りや焦りなどの苛立ちの感情が伴った場合はテ形単独となり、通常の[指示]と変わらない。用例を(19)～(23)に示す。

- | | |
|---|----------|
| (19) この書類を <u>カイ</u> <u>テ</u> 。(書け。) | [指示] |
| (20) [(19)で断られて再度指示する] <u>カ</u> <u>イテ</u> ッテ。(書け。) | [違反矯正] |
| (21) 時間がないから今すぐに <u>タベ</u> <u>テ</u> 。(食べろ。) | [現場指示] |
| (22) [念を押しながら] 明日忘れずに <u>カッ</u> <u>テ</u> ネ <u>一</u> 。(買えよ。) | [確認的指示] |
| (23) [苛立った様子で] この紙に <u>カイ</u> <u>テ</u> 。(書け。) | [指示+苛立ち] |

先行研究にもある通り《命令》は基本的にテ形で表され、それは聞き手によって形式を使い分けることはない。しかし、(24)のように緊急性の高い場面に限っては聞き手を問わず命令形を用いる。

- | | |
|---|------------|
| (24) [聞き手が横断歩道を渡る瞬間に車が走ってきた] <u>ト</u> <u>マ</u> <u>レ</u> 。 | [現場指示+緊急性] |
|---|------------|

以上のことから、《命令》における各形式の使用範囲は次項の表6のようになる。話者がどのような場面でも使用できると判断したものは「○」、どのような場面でも使用できないと判断したものは「×」、使用できる場面が限られるものは「△」とする(以降同様)。

表 6 福岡市方言における《命令》を担う形式の使用範囲

形式	家族		非常に親しいソト		少し親しいソト	
	下位へ	上位へ	下位へ	同等	下位へ	同等
命令形	△	△	△	△	△	△
連用形	×	×	×	×	×	×
テ形	○	○	○	○	○	○

4.2 《依頼》

《依頼》の機能を担う発話では、総じてテ形が用いられる。[指示][現場指示]の場合はテ形単独が用いられるが、必死に頼み込む場合の[指示]や[違反矯正]の場合は「ッテ」が低接音調で後接、[確認的指示]の場合は「ネ」が低接疑問上昇音調で後接する。ただし[指示]については、聞き手が目上の家族（主に両親）の場合、テ形単独が標準語的であるという話者の意識から、「-テクレン」や「-チャラン」の方が用いやすいという内省を得ている⁶。用例を(25)～(29)に示す。

- (25) [機械の使い方・料理の作り方・勉強などが分からない] オ[シエテ]／オ[シエテクレン]／オ[シエチャラン]。(教えて。) [指示]
 (26) [(25)で断られて、もう一度頼む] オ[シエテ]ッテ。(教えてって。) [違反矯正]
 (27) [必死に頼み込む様子で] オ[シエテ]ッテ。(教えてって。) [指示+必死さ]
 (28) 悪いんだけど直ぐに イッ[テ]。(行って。) [現場指示]
 (29) [念を押しながら] 明日忘れずにカッ[テ]ネ[一]。(買ってね。) [確認的指示]

先述の通り、テ形においては文末に上昇音調は伴わない。(30)の例は甘えた様子で反応を伺う[指示]であるが、(25)の一般的な[指示]と音調上の区別はない。久保(2021a:19)は松山市方言の命令表現において、テ形で反応伺いを示す場合に上昇音調を伴うことを述べているが、福岡市方言においてはそのような音調は見られない。

- (30) [甘えた様子で反応を伺いながら] オ[シエテ]。(教えて。) [指示+反応伺い]

以上のことから、《依頼》における各形式の使用範囲は次の表7ようになる。

表 7 福岡市方言における《依頼》を担う形式の使用範囲

形式	家族		非常に親しいソト		少し親しいソト	
	下位へ	上位へ	下位へ	同等	下位へ	同等
命令形	×	×	×	×	×	×
連用形	×	×	×	×	×	×
テ形	○	○	○	○	○	○

⁶ 2.3節で述べた通り、森・平塚・中村(2012)は「-テクレン」を西日本共通語形と述べているが、本稿では「-チャラン」と合わせて福岡市方言形と見なす。また、「-チャラン」は先行研究で述べられていた「-テヤラン」の縮約形と考えられる。

4.3 《聞き手利益命令》

《聞き手利益命令》の機能を担う発話では、命令形と連用形が用いられる。命令形は親疎関係が親の同等以下（家族の下位、非常に親しいソト）にのみ使用が可能である。「ッテ」は〔違反矯正〕の場面において低接音調で後接する。また、いずれの場面においても終助詞「ヨ」が後接することがあるが、〔現場指示〕〔違反矯正〕では連用形で下降音調を伴い、〔指示〕〔確認的指示〕では命令形で強調上昇音調を伴う。〔確認的指示〕では連用形に終助詞「ネ」も強調上昇音調で後接する。(31)～(34)に用例を示す。

- (31) 今ならバスに間に合うから早く {イ|ケ／イ|キー／イ|キーヨ}。(行け。)[現場指示]
 (32) [(31)で断られ、もう一度指示する]{イ|ケッテ／イ|キー／ッテ／イ|キーヨ}。
 (行けって。)[違反矯正]
 (33) 何か困ったことがあったら私に {レンラクシ|ー|ネ／レンラクシ|ロ|ヨ}。
 (連絡しろよ。)[指示]
 (34) [(33)について、念を押しながら]{レンラクシ|ー|ネ／レンラクシ|ロ|ヨ}。
 (連絡しろよ。)[確認的指示]

以上のことから、《聞き手利益命令》における各形式の使用範囲は次項の表8ようになる。

表8 福岡市方言における《聞き手利益命令》を担う形式の使用範囲

形式	家族		非常に親しいソト		少し親しいソト	
	下位へ	上位へ	下位へ	同等	下位へ	同等
命令形	○	×	○	○	×	×
連用形	○	○	○	○	○	○
テ形	×	×	×	×	×	×

4.4 《勧め》

《勧め》の機能を担う発話では、連用形と命令形が用いられる。命令形は家族の下位と非常に親しいソトの同等にのみ使用が可能で、連用形と命令形でニュアンスに違いはないという内省を得ている。〔指示〕では連用形に終助詞「ヨ」が下降音調で後接する場合もある（命令形への終助詞の後接は確認できていない）。(35)(36)に用例を示す⁷。

- (35) 疲れているだろうし今日はゆっくり風呂に {ハ|イリ|ー／ハ|イリ|ーヨ／ハ|イレ}。
 (入りなさい。)[指示]
 (36) [出来立ての食事を差し出して] 今 {タ|ベリ|ー／タ|ベ|レ／タ|ベ|ロ}。
 (食べなさい。)[現場指示]

以上のことから、《勧め》における各形式の使用範囲は次項の表9ようになる。

⁷ 《勧め》においては〔違反矯正〕〔確認的指示〕の場面は想定しにくいため、調査を行っていない。

表 9 福岡市方言における《勧め》を担う形式の使用範囲

形式	家族		非常に親しいソト		少し親しいソト	
	下位へ	上位へ	下位へ	同等	下位へ	同等
命令形	○	×	×	○	×	×
連用形	○	○	○	○	○	○
テ形	×	×	×	×	×	×

4. 5 各形式が担う発話機能と使用範囲

ここまで記述した内容から、各形式が担う発話機能とその使用範囲をまとめると下の表 10 のようになる。命令形は《聞き手利益命令》《勧め》を担う発話の場合に用いられるが、聞き手は家族の下位、及び非常に親しいソト（《勧め》の機能を担う発話では下位を除く）に限定される。すなわち、親疎関係が親の同等及び同等以下であれば使用可能となる。緊急性が高い場面であれば《命令》として用いられ、その場合は聞き手との関係を問わない。連用形は《聞き手利益命令》《勧め》で用いられることから聞き手利益の発話機能を担う場合に用いられると言える。一方、テ形は《命令》《依頼》で用いられるため、非聞き手利益の発話機能を担う場合に用いられると言える。連用形、テ形は、いずれの発話機能においてもすべての聞き手への使用が可能である。

表 10 福岡市方言における各形式の使用範囲

形式		家族		非常に親しいソト		少し親しいソト	
		下位へ	上位へ	下位へ	同等	下位へ	同等
命令形	《命令》	△	△	△	△	△	△
	《依頼》	×	×	×	×	×	×
	《聞利命令》	○	×	○	○	×	×
	《勧め》	○	×	×	○	×	×
連用形	《命令》	×	×	×	×	×	×
	《依頼》	×	×	×	×	×	×
	《聞利命令》	○	○	○	○	○	○
	《勧め》	○	○	○	○	○	○
テ形	《命令》	○	○	○	○	○	○
	《依頼》	○	○	○	○	○	○
	《聞利命令》	×	×	×	×	×	×
	《勧め》	×	×	×	×	×	×

5 形式・音調・発話機能・発話場面

命令形・連用形・テ形の 3 形式について、それぞれが有する音調、発話機能、発話場面の関係について記述を行う。音調は終助詞が後接しない場合とする場合で異なるため、両者を分けて記述する。まず、終助詞が後接しない場合の各形式の音調と発話機能、及び発話場面の対応を確認する。形式別にまとめると次項の表 11 のようになる。

表 1 1 福岡市方言における各形式の音調と発話機能と発話場面の対応・終助詞なし

形式	音調	《命》	《依》	《聞》	《勸》	発話場面上の特徴
命令形	無標	○	×	○	○	《命》[現場指示+緊急性] 《聞》[現場指示] 《勸》[指示][現場指示]
連用形	上昇	×	×	○	○	《聞》[現場指示] 《勸》[指示][現場指示]
テ形	無標	○	○	×	×	《命》[指示][指示+苛立ち] [現場指示] 《依》[指示][指示+反応伺い] [現場指示]

本稿の調査では、命令形とテ形が無標音調で、連用形が上昇音調で確認された。先に述べた通り、連用形で無標音調は許容されない。連用形の上昇音調については陣内（1991:25）も言及しており、「やさしい命令ないし勸め表現が、筑前や北九州を中心に最近では広く用いられている」「裸の連用形に上昇調のイントネーションを被せたもので、言い切りや断言を避けている」と述べている。この音調の連用形は本調査においてはデフォルトで現れるため、福岡市方言における連用形は上昇音調が無標であると考えられる。いずれの形式も[指示][現場指示]で用いられることが共通する。[違反矯正]と[確認的指示]は終助詞が後接しない形では表すことはできない。

続いて、終助詞が後接した場合の各形式の音調と発話機能、及び発話場面の対応を下の表 12 にまとめる。表中「強調」は強調上昇音調を、「低疑」は低接疑問上昇音調を表す。

表 1 2 福岡市方言における各形式の音調と発話機能と発話場面の対応・終助詞あり

形式	終助詞	音調	《命》	《依》	《聞》	《勸》	発話場面上の特徴
命令形	ッテ	低接	○	×	×	×	《命》[違反矯正]
	ヨ	強調	×	×	○	×	《聞》[指示] [確認的指示]
連用形	ッテ	低接	×	×	○	×	《聞》[違反矯正]
	ネ	強調	×	×	○	×	《聞》[指示] [確認的指示]
	ヨ	下降	×	×	○	×	《聞》[現場指示] [違反矯正]
テ形	ッテ	低接	○	○	×	×	《命》[違反矯正] 《依》[指示+必死さ] [違反矯正]
	ネ	低疑	○	○	×	×	《命》[確認的指示] 《依》[確認的指示]

まず、各形式に後接する終助詞について、命令形には「ッテ」「ヨ」、連用形には「ッテ」「ネ」「ヨ」、

テ形には「ッテ」「ネ」であることがわかる。「ッテ」は低接音調、「ネ」は強調上昇音調と低接疑問上昇音調「ヨ」は強調上昇音調と下降音調をとる。

発話機能に注目すると、《命令》《依頼》の機能を担う発話はいずれも低接音調、もしくは低接疑問上昇音調をとる。《聞き手利益命令》の機能を担う発話は低接音調、強調上昇音調、下降音調をとる、発話場面もそれぞれに応じて異なる。

最後に、発話場面の特征に注目すると、ニュートラルな[指示]であれば強調上昇音調が用いられる。必死さを伴う[指示]と[違反矯正]は総じて「ッテ」が低接音調で後接する。[確認的指示]では総じて終助詞「ネ」が強調上昇音調、または低接疑問上昇音調で後接し、いずれも上昇音調という点で共通する。[違反矯正]は総じて「ッテ」が用いられる。

6 おわりに

本稿の調査から、発話機能と形式の対応について、本稿での記述を基に、発話機能ごとにまとめると下の表 13 のようになる。

表 13 本稿における福岡市の命令表現の機能と形式の対応

《命令》 テ形, 命令形	《聞き手利益命令》 連用形, 命令形
《依頼》 テ形	《勧め》 連用形, 命令形

先行研究と比較すると、《命令》と《勧め》に命令形が加わっていることがわかる。本稿の調査によって、《命令》の機能を担う命令形は緊急性の高い場面において使用でき、《勧め》の機能を担う命令形は家族の下位と非常に親しいソトの同等に使用できることが明らかになった。

発話場面と文末音調については、5 節の記述を基に下の表 14 のようにまとめられる。

表 14 発話場面と文末音調の対応

	終助詞	音調
[指示]	なし, または「ネ」	なし: 無標音調, 上昇音調/ 「ネ」: 強調上昇音調
+ 苛立ち	なし	無標音調
+ 反応伺い	なし	無標音調
+ 必死さ	「ッテ」	低接音調
[現場指示]	なし, または「ヨ」	なし: 無標音調, 上昇音調/「ヨ」: 下降音調
+ 緊急性	なし	無標音調
[違反矯正]	「ッテ」	低接音調
[確認的指示]	「ネ」	強調上昇音調, 低接疑問上昇音調

発話場面については、文末音調での使い分けはなく、[違反矯正]であれば「ッテ」、[確認的指示]であれば「ネ」のように、特定の終助詞を後接させることで、その行為指示に特定の意味を与

えていることが明らかになった。その一方で、「ッテ」は低接音調しかなく、[確認的指示]についても、文末が上昇するタイプの音調を有する。[指示][現場指示]は終助詞「ヨ」が後接する場合を除き、基本的には無標音調、ないし上昇する音調のようである。

本稿では福岡市方言の命令表現について、終助詞や文末音調の観点を加え、様々な発話場面を考慮し記述を行った。終助詞や文末音調は、その方言の命令表現の全体像を把握するに当たって不可欠な要素だと筆者は考える。一方で、当概要要素は記述を煩雑にってしまう危険性も有する。引き続き検討を重ね、より整然とした記述を目指したい。

参考引用文献

- 久保博雅（2018）「愛媛県松山市方言における命令表現の使用差」『言語文化研究』第 38 巻 1-2 号,pp.397-416.
- 久保博雅（2021a）「愛媛県松山市方言における命令表現—形式・音調・発話機能・使用場面の関係—」『方言の研究』第 7 号,pp.5-27.
- 久保博雅（2021b）「命令表現に後接する終助詞とその音調—愛媛県松山市方言の青年層の場合—」『広島大学大学院人間社会科学研究科紀要「教育学研究」』第 2 号,405-414.
- 久保博雅（2022）「大阪市方言における青年層の命令表現とその文末音調」『論叢 国語教育学』18 号,pp.51-62.
- 久保博雅（2023）「神戸市方言における青年層の命令表現とその文末音調」『国語教育研究』64 号,pp.78-91.
- 三枝令子（1997）「「って」の体系」『言語文化』34 号,pp.21-38.
- 酒井雅史（2012）「兵庫県神戸市方言における命令表現」『阪大社会言語学研究ノート』10, pp.18-29.
- 酒井雅史（2013）「高知県四万十市西土佐大宮における行為指示表現」『阪大社会言語学研究ノート』11, pp.28-41.
- 陣内正敬（1991）「総論」平山輝男編『日本のことばシリーズ 40 福岡県のことば』, 1-38, 明治書院.
- 高木千恵（2009）「命令表現」国立国語研究所全国方言調査委員会編『方言文法調査ガイドブック 3』,pp.105-118.
- 平塚雄亮（2011）「福岡市若年層方言のッテ標準語の「って」と対比して—」『阪大社会言語学研究ノート』9,pp.55-65.
- 福居亜耶（2014）「京都府福知山市方言における命令表現」『阪大社会言語学研究ノート』12,pp.51-70.
- 牧野由紀子（2008）「大阪方言における命令形の使用範囲—セエ・シ・シテをめぐって—」『阪大社会言語学研究ノート』8, pp.55-74.
- 森勇太・平塚雄亮・中村光（2012）「若年層の命令形の使用範囲—栗東市方言・福岡市方言・湖西市方言—の対照から」『阪大社会言語学研究ノート』10, pp.1-17.
- 山岡政紀（2008）『発話機能論』くろしお出版.

付記 本稿は、博士論文「愛媛県松山市方言における命令表現についての記述的研究」（2022 年、広島大学）で扱った内容に修正を加え、まとめ直したものである。

（四国大学）